

令和三年気良歌舞伎

仮名手本忠臣蔵三段目

同

足利館門前進物の場
殿中松の廊下の場

配役

高師直

こうもろのお

塩冶判官

えんやはんがん

桃井若狭之助

わかさのすけ

加古川本蔵

かこがわほんぞう

鷺坂伴内

さぎさかばんない

茶坊主

家来一

家来二

家来三

家来四

足利館門前進物の場

(時の太鼓にて幕開け)

伴内 ハハ、御意のとおりにござりまする。日頃はヤレ塩治えんやで候そうろうの、桃井もものいで候そうろうのと、とつぱ、さつぱとひ

しめけども、行儀作法にいたりましては、犬コロを屋根へ放り投げたようなものでござりまする。

ハツ、ハツ、その儀は委細、承知つかまつつてござる。

ゝ見附の侍、あわただしくまかり出で

家来四 ハツ、もうしあげます。

伴内 何事じゃ。

家来四 只今、桃井若狭之助わかさのすけが家来、加古川本蔵かこがわほんぞうと申す者。師直公に御直談申し上げたしと早馬にて参っており

まするが、いかが計らいましょう。

伴内 桃井若狭之助わかさのすけが家来、加古川本蔵かこがわほんぞう、早馬にて参りしとな。イヤ御用繁多の師直公、かようなものは追っ

かえせ、追つかえせ。

(ト駕籠から手の叩く音)

アアこりや、待て待て。

(駕籠の中の師直に向かって)

伴内 ハツ、ハツ、ハハ。(伴内、家来に向き直つて) コレ家来ども。これへ参れ、これへ参れ。

家来皆　へい。

家来一　なんぞ御用でございますか。

伴内　その方どもも承りおろうが、過日鶴ヶ丘八幡宮において、若輩わかさのすけの若狭之助、主人師直公より恥辱を受けしを遺恨に思い、仕返しに参りしものと相見える。じゃによつて本蔵これへ参りなば、有無を言わさずバツサリと仕留めるのじゃが、必ずともに抜かるまいぞ。

家来一　ハ、左様なれば本蔵これへ参らば、バツサリとやるのでござりまするか。

伴内　左様じゃ。

家来一　オイ皆聞いたか。本蔵これへ来たら、バツサリだよ。

家来二　本蔵来たらバツサリだな。

家来三　オオ、本蔵きたらバツサリだと。

家来四　オオ。バツサリだな・・・こりや何か合図してもらわなきやわからねえな。

家来一　そうよな。合図がなきやわからねえな・・・もし御旦那おだんな。何ぞ合図をお願いいたします。

伴内　合図がのうてはかなうまい。しからば斯様かよういたそう。

本蔵これへ来たりなば、身どもが何気のう挨拶いたし、そこで・・・エヘン、と咳払いをいたすによつて、それを合図にバツサリと仕舞うて取るのじゃ。

家来一　左様なら御旦那おだんなが、エヘン、と咳ばらいをしたら、バツサリでござりまするか。

伴内 左様じゃ。

家来一 オイ皆聞いたか。

家来二 オウ。

家来一 おだんな 御旦那がエヘンと云ったらばっさりだよ。

家来二 エヘンばっさりだな。

家来三 ひとつ稽古をつけてもらおうじゃないか。

家来一 そうだな。おだんな もし御旦那、お稽古をお願いいたします。

伴内 なんじゃ稽古じゃ、オオ。良き心がけじゃ。しからばこれにて稽古をいたしてつかわそう。

まず本蔵がこれへ来たりしものと思え。そこで身どもが、これはこれはどなたかと存じましたら、桃井

わかさのすけ 若狭之助殿のご家来、かがわほんぞう 加古川本蔵殿でござったか。ようこそようこそ、お越しなされた。エヘン。

家来皆 これだ、これだ……。

家来一 おだんな 御旦那がエヘンとおっしゃった。おっしゃったから、それ。

家来皆 バツサリ。

伴内 たわけものめ。何だ、おだんな 御旦那がエヘンとおっしゃった、おお、これだこれだ。エヘンとおっしゃったか

ら、バツサリだ……。そのように悠長にいたしては本蔵とて心得ある者。その方らの首は胴につ

いてはおらぬわい。

家来皆 オオ・・・。

伴内 よいか。身どもがエヘンと申さば、何もかも打ち捨てて、バツサリとやるのじゃわい。

家来一 左様なら、御旦那おだんながエヘンとおっしゃったら、何もかも打ち捨てて、バツサリでございますか。

伴内 ああ左様じゃ。

家来一 オイ皆聞いたか。御旦那おだんながエヘンと言ったら何もかも打ち捨てるんだ。

家来皆 おお、何もかも打ち捨てるんだ・・・。

家来一 モシ御旦那おだんな。今一度、お稽古をお願いいたします。

伴内 ああよしよし。今一度稽古いたそう。これはこれは本蔵殿でござったか。ようこそようこそ、お越しなされた。エヘン。

家来皆 何もかも打ち捨てて・・・。

家来一 オウ皆、打ち捨てたか。ソレ。

家来皆 バツサリ。

伴内 てきて情けないやつらじゃ。何もかも捨てよと申して、得物を捨てて何をもって討つてとるのじゃ。よいか、身どもがエヘンと申さば、無駄を捨ててバツサリとやるのじゃ。

家来一 アア左様なら御旦那おだんながエヘンと仰ったら無駄を捨ててバツサリですか。

伴内 ああ左様じゃ。

家来一 オイオイ、無駄を捨ててバツサリだとよ。

家来二 なんだ無駄を捨てるのか。

家来皆 そうかそうか。

家来一 もし御旦那おだんな。今一度お稽古をお願いいたします。

伴 内 しからばもうこれきりだぞ。これはこれは本蔵殿でござったか。ようこそようこそ、お越しなされた。

エヘン。

家来皆 バツサリ。

伴 内 できた。かがわほんぞう加古川本蔵これへと申せ。

家来三 ハハ。

(家来三、家来四、花道へ本蔵を呼びに行く)

〽主従刀の目釘をしめし、手ぐすねひいて、待ちかけたり

〽言葉に従いかがわほんぞう加古川本蔵、しもべに持たせし進物を師直が前に並べさせ

(花道より本蔵出る。家来三目録、家来四進物を持って出て、並べる)

〽はるか下がって手をつかえ

本 蔵 はばかりながら師直公ごんじょうに言上奉る。それがしももいわかさのすけことは桃井若狭之助が家臣にてかがわほんぞう加古川本蔵といえる者。

主人若狭之助わかさのすけにこの度の大役仰せ付けられ下さるる段、武士の面目身めんもくに余りかたじけなく存じ奉ります

る。若輩じやくはいの若狭之助わかさのすけ、首尾よく御用相勤むるのも、これ皆、師直公のお執り成し。主人をはじめ奥方、

一家中の我々どもにいたるまで、かたじけなく存じ奉ります。近頃、甚だ些少せうしやうにては存じ候まうえども右御礼おんれいのため、一家中よりの贈り物。すなわち目録、何卒お取次のほど。伴内殿お願い申す、伴内殿。

(ト伴内知らぬ顔をしているのを見て近寄って懐中より包み金を出し、伴内の袂へ入る)

本 蔵 これさ、伴内殿。

(ト袂を引く)

へ不思議そうにそっと取り

伴 内 へへへ……。これはこれは、どなたかと存じましたら、桃井若狭之助殿わかさのすけのご家来、加古川本蔵殿かこがわほんぞうでこ

ざったか、ようこそようこそ、お越しなされた、あちと手前、考え事をいたし失礼の段、平に平にご容赦ごようじやうください。しからばこれが御進物でござるか。ウム左様でござるか。只今身どもがご披露つかまつる。

(ト目録を開く)

伴 内 エヘン。

(ト家来が討ちかかろうとするのを慌てて止めて)

伴 内 アア、違ちがう……。控え控え、控えおろう。エへへ……。イヤなに本蔵どの、中間小者ちゆうげんこものと申す者は

礼儀作法をわきまえず、失礼の段、平に平に。ではご披露つかまつる。

ひとつ巻物三十本、黄金二十枚、若狭之助奥方。わかさのすけひとつ黄金二十枚、家老加古川本蔵。かこがわほんぞう同じく十枚、ば・番頭でござった。同じく十枚、侍中。右のとおり。

へと読み上ぐれば、主従顔を見合わせて、手持ちぶさたに見えにける

(ト師直、駕籠のうちより伴内に指図)

伴内 ハッ。イヤなに本蔵殿。せつかくのお志。受納つかまつるとの仰せでござる。

本蔵 オオすりや、ご受納くだされるとな。かたじけなく存じ奉りまする。

伴内 重ねて主人申しまするには、御貴殿にも今日の御座敷、拝見なされてはいかがとの仰せでござる。

本蔵 アアいや。陪臣のそれがし、御前に対して恐れあり。その儀は平にご容赦のほどを願いあげまつる。

伴内 なんのなんの。出頭第一の師直公ご案内いたすに、誰が点の打ち手がござろう。平に平に。

本蔵 さほどまでのお言葉、辞退申すも返って失礼。お供いたすでござりましょう。

伴内 さらにご案内つかまつる。

本蔵 ハハア。

伴内 ソレお乗り物。

家来皆 ハハア。

へ金で面張る算用に、二一天作算盤の、桁を違えぬ白鼠、打ち連れ御門へ

(ト家来一、家来二、駕籠を担ぐ。家来三目録、家来四進物を持って門へ入る)

伴 内 本蔵殿、敷居た高うごごる。

へ入りにける

(ト伴内、本蔵、門の中へ)

(時の太鼓。暗転)

殿中松の廊下の場
でんちゆう

脇能すぎて御楽屋に鼓の調べ太鼓の音、天下太平繁昌の寿祝う直義公、御機嫌ななめならざりける
わきのう おん つつみ ただよし

若狭之助はかねて待つ師直遅しと御殿のうち、奥をうかがう長袴の紐締めくくり気配りし
わかさのすけ

(若狭之助、花道より出てくる)
わかさのすけ

おのれ師直真つ二つと、刀の鯉口息を詰め、待つとも知らぬ師直主従、遠目に見付け

(ト上手より師直と伴内出る。見つけて若狭之助走り寄って見得)
わかさのすけ ごとじよう

師直 これはこれは若狭殿にはお早い御登城、イヤハヤ我折りました。我ら閉口、閉口ついでにそこもとに言

い訳いたします。お詫び申さにやならぬ事がある。いづぞや鶴ヶ岡において拙者の申した過言、サゾ

お腹が立ったであろう。もつともじゃ、そこをお詫び……。 (若狭之助斬りかかろうとする)
わかさのすけ

武士が手について謝っておる。仮令をそこもとが物馴れたお人なりやこそ、ほかほかのうるたえ者でみ

さっしやれ。この師直真つ二つ、怖やの怖やの。有様はそこもとの後ろ影、手を合わせて拝みましたじ

や。ササ武士が帯刀を投げいだし、手を合わせてこれ程のことを、聞き入れのないそこもとではないわ

さ。あのここの粹め、粹め、粹さまめ。 (再度、若狭之助斬りかかろうとする)
すい すい すい わかさのすけ

伴内、お詫び、お詫び。

金が言わせる追従とは夢にも知らぬ若狭之助、今更抜くに抜かれもせず、寝刃合わせし刀の手前
ついでしよう わかさのすけ

〽差しうつむきし思案顔

(ト若狭之助、伴内を蹴とばし、怒りを抑えて座る)
わかさのすけ

〽ふすまのかげには本蔵が、まばたきもせず守りける

(トふすまのかげから本蔵が見守る)

師直 コレ伴内、塩冶ははまだ登城いたさぬか。

伴内 いまだお上がりではございませぬ。

師直 主が主なら家来まで、諸事細心のつく奴は一人もない。(若狭之助キツとなる)イヤそれに引き換え、
しゅう しゅう しよじこまごころ わかさのすけ

若狭殿にはお早い御登城、いまだ時刻も早うござれば、詰所にておくつろぎ下され。ササ伴内、お手を

取れ、お手を取れ。

若狭 若狭之助、心地悪しゅうござるわい。
わかさのすけ あ

師直 若狭殿には心地悪しいとおっしゃる。ソレ、お背中お背中。

若狭 さほどでもござらぬわえ。

(ト背中をさする伴内を振り払う)

師直 これこれ、さほどでもないとおっしゃる、うろたえものめ。

伴内 ハハア。

師直 ご案内ご案内。

伴内 ハハア。

(ト若狭之助わかさのすけ斬りかかろうとするを、師直は投げ出した刀を指して)

師直 このとおりに、このとおりにじゃ……。

〽主わかさのすけ従寄ってお手車に迷惑ながら若狭之助、これはと思えど是非なくも

(ト若狭之助わかさのすけ思い直して再び斬りかかろうとするを、師直土下座して)

師直 このとおりに、このとおりに。

(ト若狭之助わかさのすけ、怒りを抑えて奥へ入る)

師直 若狭殿にもさぞお腹が立ったであろう。もつともじゃ、もつともじゃ。じゃによって、師直、帯刀を投げいだし、この通り両手をつけて謝っておる。平に平にご容赦ください。このとおりにじゃ、このとおりにじゃ。お詫びを申せば何卒なにとぞなにとぞ何卒。

(ト伴内、立ち寄って)

伴内 御前様ごぜんさま……コレサ御前様ごぜんさま。

(ト師直の袂を引く。師直顔を上げて)

師直 伴内。

伴内 ハハッ。

師直 あの小僧め、俺を切る気とみゆる。馬鹿ほど怖いものはないのう。

伴内 御意にござりまする。

師直 床几しょうぎをもて。

伴内 ハハッ。

(ト伴内、刀を師直に手渡し、床几を持ってくる。師直座って)

師直 次に控えよ。

(伴内、上手に入る)

〴〵ほどもあらせず塩冶判官、御前へ通る長廊下

(ト判官、花道より出てくる)

〴〵師直声かけ

師直 遅い、遅い、判官、今日こんにちた、正七ツ刻しょうどきと申し渡したではないか。

判官 遅なわりしは拙者ぶちようほうが不調法、平におゆるしくだされい。

(ト花道より近寄る。座るところへ茶坊主が文箱を持って下手より出てくる)

茶坊主 塩冶様へ申し上げます。御内方顔世様ごないほうかおよより、師直公へ御覧に入れたきとあつて、御家来早野勘平殿、こ

れなる文箱ふばこ、持参おくいたしましてござりまする。

判官 ナニ奥顔世おくより文箱ふばこが到来おきいたしたとな。

茶坊主 ハハ。

判官 いかがいたした事じゃ。御用繁多ごようはんだの師直公へ対し失礼とやいわん。文箱ふばこはそのまま返しつかわせ。

茶坊主 ハハ。

師直 アアいや、待て待て。こりや斯様かようでござろう。それがしかねてより、御歌おうたの添削てんさくを頼まれおりますれば、そのことでなござろう。イヤ拝見いたそう。

判官 ではござりましょうが、あまりと申せば失礼ゆえ文箱ふばこはそのまま返しつかわす。

師直 アアいや、苦しゅうござらん。サ、これへこれへ。

判官 (茶坊主に向かつて) これへもて。

茶坊主 ハア。

(判官、茶坊主から文箱を受け取る)

判官 さがってよい。

茶坊主 ハア。

(師直、茶坊主に床几を下げさせて座る)

師直 これはこれは判官、お手づから恐れ入る。では拝見つかまつろう。いまだ時刻も早うござれば、しばらくこれにてお寛ぎください。しからば拝見つかまつろう。判官、御免ください。 (文箱から短冊を取り出し) オオお見事、お見事。ナニ「さなきだに重きが上の小夜衣さよしろも わが夫つまならぬ つまな重ねそ」…。

「さなきだに重きが上の小夜衣さよしろも わが夫つまならぬ つまな重ねそ」こりやコレ新古今の歌、この古歌に

添削とは、ムウ。

へと思案のうち、わが恋の叶わぬし、さては夫に打ち明けしと思う怒りをさあらぬ顔

師直 判官、お手前、この歌御覧じたか。

判官 イヤ、いまだ内見はつかまつりませぬ。

師直 左様か。ではお聞かせ申そう。「さなきだに重きが上の小夜衣 わが夫ならぬ つまな重ねそ」。お手前の奥方はきつい貞女ていじょでござる。ちよつとつかわさるる歌がこれじゃ。おお貞女、うん貞女、ことに御手蹟ごしゆせきといひ御器量ごきりょうといひ、そこもとはあやかり者だの。御自慢さっしやい、御自慢さっしやい。その奥方のそばにへばりついてござるによつて、ご登城も遅うなるはず。その内にばかりへばりついてござるによつて、御前ごぜんの方はお構いなしじゃまで。

へあてこする雑言過言、あちらの喧嘩の門違いとは、判官さらに合点いかず、むつとせしが押し鎮め

判官 ハハハ、これはこれは師直公には先刻よりのお言葉、御座興おざきょうでござるか、または御酒機嫌ごしゆきげんか。こりや御酒参つたと相見ゆる、ハハハ。

師直 判官、お手前いつこの師直に御酒くだされた。いつ御酒をくだされた。御酒くだされても飲まいでも、勤むるところはきつと勤むる武蔵守むさしのかみ。判官、お手前御酒参つたか。

判官 イヤ拙者御酒などを頂いた覚えはありませぬ。

師直 お手前御酒を・・・道理こそ酒くさい。いや酒くさい。その奥方ときいつおさいつお酒盛り、それで御

登城が遅うなったか。アア無理はない。それほど奥方が大切なら、明日からは出仕無用だ。じたい、そこもとのような侍を何とやら申した……。オオそれぞれ、井戸の鮒ふなというたとえがある。アア聞いておかつしやい。何が、かの鮒ふなという奴は、わずか三尺か四尺の井の中を、天にも地にもないと心得おりまするじゃ。それが井戸替えの折、釣瓶つるべにかかってあがりましたを大川へ放ちやると何がさて、うちにばかりいた奴じゃによって、喜んで度を失い、あちらへ、ふらふら、こちらへ、ふらふらするうちに、橋杭はしぐいへ鼻つばしらをぶつつけて、ピリピリピリと死にまする。お手前がその通りだ。あの様な小さな屋敷から、この様な大広間へ出たによって、うろたえて度を失い、手前の詰所はいずれでござる。判官、御手前の詰所はあちらじゃ、アアいやいや、こちらじゃ、あちらじゃと、うろろろ、うろろろするうちに、お廊下の柱へ鼻つばしらを打ぶつつけて。それ、ピリピリ、ピリピリ、ピリピリと死にまするじや。その鮒ふながよ……。ム、判官、お手前どうやらその鮒ふなに似てまいったな。おお、そのりきんだ所は鮒そのままじゃ。師直、この年に相成るまで、鮒ふなが袴かみしもをつけて登城いたすを見るは初めて。コレ伴内、判官が鮒ふなになられたぞ。ハハ……。鮒ふなそのままじゃ。鮒ふなエー、鮒ふなエー。鮒ふなだ鮒ふなだ、鮒ふな侍むさしのかみだ。ダハハ……。

ㄣと出放題

(師直、見得)

ㄣ判官腹に据えかねて

判官 伯州の城主塩治判官高定を、うろくずにたとえしは本性にてはよもあるまい、気が違むさしのかみうたか武蔵守。

師直 だまれ判官。出頭第一の師直に向かい気が違うたとは何のたわ言。しゅつとつう

判官 すりや最前よりの雑言過言、本性でお言いやつたか。ぞうごんかごん ほんしよう

師直 ウム本性だ、本性だよ。本性ならおみや、どどどうするのだ。ほんしよう ほんしよう

判官 本性なれば。ほんしよう

師直 本性なれば。ほんしよう

(判官、刀に手をかける)

師直 殿中だ。でんちゆう

(兩人、きめる)

師直 殿中だ、殿中だ、殿中だぞ。殿中で鯉口三寸くつろげれば家は断絶じゃ。でんちゆう でんちゆう でんちゆう こいぐち

(判官、我に返って刀を収める)

師直 ご承知か。判官、御手前それをご承知か。左様か、御手前それをご承知か……。それなれば、サア師直切られよ。この年に相成り御手前の手にかかれば本望じゃ。サア切られよ、サア切ら……。サア切らぬか、切らんのか。切れ、切れ、切れ、切れ切れ判官。

(判官、きつとなるが堪える)

判官 しばらく、しばらく、しばらくしばらく。(手をついて) 最前よりの不調法、何卒お心なおされて、今日なにとぞ ほんしようほう なにとぞ こんにちの七五三、五五三、何卒お指図の程を師直公。師直公、師直公。

(判官、再び刀に手をかける)

師直 その手は何だ。

判官 この手は。

師直 その手は。

判官 この手は。

師直 その手は、何だ。

判官 この手をついて、お詫びつかまつる。

師直 判官、御手前詫びさっしやるか。オ、御手前泣かつしやるか。ハハハ可哀そうに。ウム、ヤイヤイそれなれば今日の御役目、こんにち おやくめ七五三、五五三、何もかも……。

判官 すりや、あのわたくしに。

師直 ヤお身じゃない、若狭どのに。あずま東えびすの存ぜぬことだわ。

(師直、立ち上がり行こうとするを判官長袴を踏みつけ)

判官 師直、待て。

師直 コレ何をする。ホレ、のかぬか、のかぬかい。エエイ袴が破れる。ホレ、のかぬ……。まだ何ぞ用があるのか。

判官 その用は。

師直 その用は。

(判官、師直に切りつける。本蔵出て来て、判官を抱きかかえて止める。伴内、師直を抱えて上手へ逃げる)
へ上を下へと

(大名たち出て来て判官を抑える)

(幕)